

祇園の心

中津市長 奥塚 正典

今年も中津祇園が近づきました。子どもの頃から関わった皆さんは沸き立つ情熱を抑えきれず血が騒ぐようです。祇園地区の市職員もこの時季、私の話など上の空、心ここにあらずと言うのは冗談ですが、気持ちは相当高揚しています。それほどまでに祇園祭は人々の心と体に染みついているのです。

祭りの景色は多様で、人、道具、香りや音色、夏の風で彩られたドラマのようです。さしずめ、家族、親戚、町内の人々、友達、踊り子、見物客が出演者。舞台は、祇園車、高^{たか}鉾^{ぼこ}や提灯の町並み、詰所、露店、食と酒、青空、太陽、突然の雨です。そして祇園車の練り込み、引き綱の感触、飛び散る汗、鉦^{かね}の音、幼馴染との歓談、ふるさとへの愛着、かつて思いを寄せたなつかしい人との再会などが定めのないシナリオとなって展開します。氏は祇園の伝統を守る使命感の中、時の経過と照らし合わせ自分の存在と生きている証しを確認し、未来へつなげていると言うと少し大げさでしょうか。

言い換えると、時に人間は祭りに自己の活動エネルギーを集中的に向けながら、意識的か無意識のうちに関わらず、過去を振り返り現在の自分のあり様や考えの進化を確かめ、明日を生きる元気を得たりしているのではないか。

そういえば学生時代を過ごした京都の祇園祭、優雅な中に京商人の伝統への執着、誇り、エネルギー発散のすさまじさは桁違いです。その真髄は歴史の深いところに根ざし営々と引き継がれています。中津祇園もルーツは異なるものの、その心は相通じるものがあるのでしょうか。



中津祇園

人混みに押されながら京都四条通りを一人さびしく歩いていた自分を思い出すと、同郷の人生のパートナーや多くの市民の皆さんと歩き楽しめる中津祇園の方がだんぜん幸せ感が強く自分に合っています。少し中津鼻^{なかつびいき}貞が過ぎますかね。